

中国文学講義（模擬授業用）

春望

杜甫（七一二〜七七〇）

（原文）

（書き下し文）

國破山河在<sup>レテ</sup>リ

城春草木深<sup>ニシテ</sup>◎シ

感<sup>ジテハ</sup>時花濺<sup>ニ</sup>ギ<sup>レ</sup>涙<sup>ヲ</sup>

恨<sup>ンデハ</sup>別鳥驚<sup>レハ</sup>カス<sup>ニ</sup>◎ラ<sup>心</sup>

烽火連<sup>ナリ</sup>ニ三月<sup>ニ</sup>

家書抵<sup>ル</sup>ニ萬金<sup>◎ニ</sup>

白頭搔<sup>ケバ</sup>更<sup>ニ</sup>短<sup>ク</sup>

渾欲<sup>テ</sup>不<sup>ス</sup>レ勝<sup>ラント</sup>レ簪<sup>ヘ</sup>◎ニ

【詩型・韻字】

五言律詩。押印◎は「深（しん）・心（しん）・金（きん）・簪（しん）」

【語釈】

○春望：春の日のながめ。七五七年の春、杜甫が安祿山率いる反乱軍により長安に軟禁されていた時期の作。○国破：国家としての秩序が崩壊する。具体的には、唐の都長安が反乱軍に占拠されたことを指す。○城：ここでは長安のまち（都市）を指す。古代の中国の都市は、多く城郭に囲まれていたため、現代中国語でも都市を「城市」という。○感時：時勢を悲しみ嘆く。○恨別：親しい人々との別れを痛み嘆く。○鳥驚心：（美しい）鳥の鳴き声にも心が乱れさわぐ、心が痛む。○烽火：のろし。ここでは戦乱状態のことをいう。○連三月：幾月もつづく。「三」は不特定多数を示す概数。あるいは「三か月つづく」、「春の三月までつづく」とも解する。○家書：家族からの手紙。○抵万金：万金に相当する。「万」は多数・多量を示す語。○白頭：白髪の頭。○渾：まるで、まったく。○不勝簪：冠を髪に固定するかんざしがさせなくなる。「不勝」は「くらたえられない、くらの用に足りない」。

春 曉

孟 浩然 もう こうねん

(六八九〜七四〇)

(原文)

(書き下し文)

春 眠 不 覺 曉 ◎

しゅんみん あかつき  
春 眠 曉 を 覚 え ず

處 處 聞 啼 鳥 ◎

しよしよ ていてう  
処 処 啼 鳥 を 聞 く

夜 來 風 雨 聲

やらい ふうう こゑ  
夜 來 風 雨 の 声

花 落 知 多 少 ◎

はな お し たせう  
花 落 つ る こ と 知 る 多 少

【詩型・韻字】

五言絶句。押韻◎は「曉(げう)・鳥(てう)・少(せう)」

【語釈】

○春曉：春の明けがた。○春眠：春の夜の(心地よい)眠り。○不覚曉：夜が明けたことに気がつかない。「覚」は、気づく、感づく、の義。○処処：あちらにもこちらにも。現代日本語の「ところどころ」ではない。○聞：きこえる。ここでは、意識的にきく「聴」とは区別して用いられないよう。○啼鳥：鳴いている鳥の声。○夜来：昨夜。「来」は、語調をととのえる助字。○知多少：どれくらい散ったであろうか(それもよくわからないほどだ)。「多少」は、疑問詞で、どれほど、どのくらい、の意。一般に中国古典詩では、目的語が疑問詞の場合には、動詞の否定語が省略されることが多い。したがって、「知多少」は、「不知多少」というのと同じ。また、「多少」を「多い」の意に解し、「さぞたくさん散ったことだろう」とする説もある。

唐・開元・天宝時代の地図

(十節度使配置図)

